
【カーネーション】

神崎慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【カーネーション】

【Nコード】

N5258H

【作者名】

神崎慧

【あらすじ】

　第二部、始めました。その街では、噂が囁かれていた。【カーネーション】という名前と呼ばれる、記憶を消すことの出来る薬がある、と。そして、それを売っているのは一つの願いを宿した一人の少女だった。

プロローグ（前書き）

短いです。

プロローグ

「……もしもし?」

『……あなたが、メイさんですか?』

「ええ。そうですが……?」

『あの、【カーネーション】を買いたいんですけど……』

「……ああ、お客様ですか。それじゃあ、名前を聞かせていただけますか? もちろん、統一していただければ偽名でも何でも良いのですが……」

『……イズミ、と呼んでください』

「分かりました。では、日時と場所は?」

『え? 私が決めても良いんですか?』

「ええ。イズミさんの都合に合わせます」

『じゃあ、明日……12月18日の午後1時に坂橋公園の入り口でお願いします』

「……分かりました。13時に坂橋公園の入り口ですね? それでは、これで……」

『あっ、はい。お願いします』

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これから頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

第1話『全ての始まり・未来の源泉』

「ふう……」

私は電話を切ってから、深くため息を吐いた。

だんだん慣れてきたとは言え、普段使わないような敬語のおかげで精神力が極端に削られる。

まあ、それも仕事上仕方ないんだけど。

私の仕事は【カーネーション】を売ることだ。

1本5000円もする私の【カーネーション】には、もちろん秘密がある。

麻薬。

まだ見つかってないから、薬の方が良いのかもしれないけど。

どっちにしても、見つければ確実に麻薬に分類されるだろう薬が、【カーネーション】の茎の中に仕込まれているのだ。

その薬自体が見つかっていなくて麻薬にも分類されていない今は、それを売るのが犯罪と呼ぶのは難しいだろう。

それに、見つかったとしても、薬事法違反で課せられる罰金が精一杯だと思う。

合法とも非合法とも言えないこの【カーネーション】が見つかっていないのは、それを売っているのが私だけだからというのが大きいだろう。

逃げ道はいくつも用意しているし、切り札もある。

だから私は、この2年間捕まったことはなかった。

そして、それはこれからも変わらない。

2年前。

私がまだ高校生になって間もない5月。

科学探求部という変な名前前の部活に所属していた私は、その中で花の配合を行っていた。

そのとき、私はこの麻薬の作り方を知ったのだ。
偶然という言葉が当てはまる。……そんな発見だった。

どの花を配合させたのか、なんていう液体を使ったのかは企業秘密で、伏せるけど、たまたま出来たものだった。

「珍しいのが出来たじゃないか」

よくやったな、と言って笑いながら私の頭を撫でてくれたその先輩が、最初の犠牲者だった。

その真っ赤になった花を持ち上げて、眺めたり、香りを楽しんでいた。

そのとき。

「……う……あ……っ!? ……うあああああっ!?」

小さく呻いたと思うと、次の瞬間に叫び声をあげた。

そのまま倒れて、床の上を叫びながらのたうちまわる。

このときは休日で、部室にいたのは私と先輩だけ。

私は、ただ混乱するしかなかった。

何が起こったのかわからなくて、ただおろおろとしながら歩き回った。

どれくらいそんなことが続いたのか分からない。

私が気付くと、教室は静けさを取り戻していて、先輩は気を失っていた。

そのおかげかは分からないけど、落ち着きを取り戻していた私は、先輩の手に握られている花の存在に気付いた。

真っ赤な、思わず血を連想してしまうような色をした、そんな花。その花の香りを嗅いだ先輩が、おかしくなってしまったのだ。

それはつまり。

「……私の、せい……?」

ズキンッ。

胸が苦しい。

「私が作った花のせいで、先輩は……」
ズキンッ。

息が荒くなっていくのが自分でも分かるほどだ。

「私が……せん……ぱいを……」

ズキンッ。

胸を押さえながら後ずさる。

ズキンッ。

この場所から逃げ出すように。

ズキンッ。

現実から目を背けるように。

ズキンッ。

その後、先輩はすぐに目を覚ましけど、忘れちゃった。

その日、何が起きたのか。

今までに何があったのか。

私のことも、自分のことも。

何も、覚えていなかった。

すべて、忘れちゃった。

私はそれからすぐに救急車を呼んで、先輩を病院に運んでもらって、色々な検査をしてもらったけど、原因不明の記憶喪失なのだということだけ、告げられた。

私が花のことを言っても取り合ってもらえず、先輩はそのまま入院した。

花のことを誰に話しても無駄だった。

そんなことがあるはずがない、と一蹴されるか、お前のせいじゃない、と勝手に同情されて慰められるかのどちらかだった。

医者も警察も探偵も、学校のみんなや先輩の家族も。

誰も真剣に聞いてくれなかった。

誰もアテになんて出来ないのだから、自分でやるしかないのだ、

と。

自分で調べて、先輩を治すのだ、と。
そう思った。

先輩を治すために手段を選ばないことを決めた。

先輩を助けるための最短距離を進むことを決めた。

だから私は、【カーネーション】を作って売り始めた。

そして、それを使った人の様子を観察しながら、少しずつ改良していった。

そのおかげで、最初の頃とは違って一回ですべてを忘れる人はいなくなった。

それどころか、今では一週間単位で消せる記憶の幅を調節できるようになった。

そして、消した記憶を戻す方法も、少しずつだけ分かってきている。

もうすぐだ。

もうすぐ先輩の記憶を取り戻せる。

そうしたらきっと、今まで犠牲にしてきた人の記憶もちゃんと治すから。

だからね、先輩。

全部がちゃんと終わったら、私のこと、許してくれる？

また、いつもみたいに笑ってくれる？

今までみたいにはめてくれる？

私は先輩が好きだった。

だから先輩に戻ってきてほしい。

それがワガママなのは分かっているつもりだ。

だけど、それはおかしいことなの？

好きな人と一緒にいたいと思うのは、そんなに変なことかな？

私はそうは思わない。

だから私は、今までこの仕事を続けてこれたのだから。
悪いことは忘れてしまえばいい。

そんな考えを持った人を犠牲にしてこれたのだから。

あと少し……。

もうすぐ先輩を治すことが出来る。

だから、私は捕まったりはしない。

せめて、先輩を治すまでは……。

時計を見ると、もうすでに夜の11時を過ぎていた。

そろそろ寝よう。

明日も仕事があるのだから。

第2話『彼女の思い・眠れぬ夜』

それを私が知ることが出来たのは、たぶん偶然だったのだろう。ただ、その偶然は逃すには余りに惜しい気がした。

だから捕まえた。

それだけのこと。

電話を切った後に広がるのは恐怖と罪悪感。

記憶を消すというのは、過去の否定であり、そして、それはそのまま自身の否定だ。

彼女との電話中、声が震えているのが自分でも分かるほどだった。イズミ、と本名を名乗ったのは罪悪感からくるものなのかもしれない。

明日という急な注文は彼女は迷惑に感じただろう。

だけど、早く忘れてしまいたかった。

その思いが、記憶を消すことへの恐怖を上回っていた。

明日が待ち遠しい。

それは確かに偽らざる今の心境だった。

しかし、それとは同時に明日が来ないことを願う自分がいるのも確かだった。

今更だが、本当にこんなことに手を出しても良いのかという思いもあった。

だけど、忘れてしまいたいという思いは強く、その気持ちを覆すことは、やはり無さそうだった。

布団に入って横になる。

……今日も眠気は襲ってこない、か。

あの日から眠ることへの恐怖というモノがあるのか、眠ることが出来なくなっていた。

目を瞑って、ただぼんやりと過ごす。

そうすることで目と脳を休ませ、少しでも睡眠と同じ効果を得るようにする。

それがここ数日のうちに私の日常になっていた。

人は睡眠を取ることと体と頭を休ませる。

そうしなければ、人は生きることが出来ないのだそう。

しかし、体を休め、頭を休めることが出来れば、睡眠は必須というわけではないらしい。

実際、そうして眠らずに生活する人もいるという。

だから私も眠れなくなっただけからはそれを実践するように心掛けているのだ。

そんなどうでもいいことを考えているうちに、また今日も一日が終わり、始まっていく。

第3話『彼女の過去・眠れぬ原因』

最初は、それが何を意味するのか分からなかった。

こういうのを気配で起きた、なんて表現してもいいものなのかは分からない。

だけど、目が覚めた私は、それがまだ朝ではないということに気付いて、ただびっくりしていた。

普段なら、少なくとも目覚ましが鳴り響く7時頃まで起きることはない。

そんな私がまだ部屋が暗いうちに起きるというのは、なんだか変な感じだった。

だけど、それを思うのと同じように、不思議なことに気が付いた。寝ていた私の上に、人がいたのだ。

ぼんやりと見えるその顔は、もちろん、知らない人ではなかった。いや。よく知っている人だった。

そこには、自分の手を支えにして、私に覆い被さるようにする、お父さんの姿があった。

ただ、いつもとは違う、荒い息づかいで。目が、怖かった。

たぶんそれは、本能的な恐怖だったのだろう。

ただただ、いつもと違うお父さんの姿が、恐かった。

「おとう……さん？」

なんとか出てくれたその言葉は、掠れてしまって、本当に発することが出来たのか、分からなかったし、お父さんはそれでも、私の上で荒い息を繰り返すだけだった。

「――」

ふいに、小さな声がお父さんの口から漏れた。

それはあまりにも小さくて、その上震えていて、ちゃんと聞き取

ることが出来なかった。
だけど。

それが始まりを告げたらしく、お父さんの体がゆっくりと動いた。

悲鳴は、あげなかった。

いや、叫ぶことが、出来なかったのだ。

恐怖が、言葉を封じてしまっていた。

私に出来たのは、目を瞑ってただひたすらに耐えることだった。
感覚を遮断できたら、どんなに良かっただろう。

そんなことを考えた。

終わった後、お父さんは無言のまま、部屋を出ていったみたいだった。

ただ、それだけだった。

次の日からは、またいつも通りだった。

厳しくも優しい、私のことを心配してくれる、いつものお父さんだった。

夢だったんじゃないかと、何度思っただろうか。

夢であってほしいと、何度願っただろうか。

でも、あれは間違いなく現実で、あれから一睡もすることが出来なくなったのだから。

寝てしまえば、繰り返しされるような気がしたのだ。

それが、怖かった。

そうなることが、恐ろしかった。

そんな思いが、私を眠れない体にしてしまったらしい。

そうして、何もなかったフリを続けてしばらく経った頃。

彼女のことを――【カーネーション】の存在を知った。

あれからも、私以外はいつも通りで。

だから私が忘れればそれで済むのだと、そう思った。

第4話『彼女の日常・眠れぬ朝』

目覚ましが鳴り響く。

それが私にとってはいつもの朝だった。

眠れないまま朝を迎えるようになってからも、それは変わっていない。

あのときより前に日常だったことを変えるのが、怖かったのだ。だからこそ、いつも通りだった。

朝に目を覚ましたらご飯食べてから学校行って、終わったら友達と寄り道したりしてから帰ってきて。

そんな、なんでもない日常としての毎日を繰り返す。

そうやって過ごしてきたからこそ、忘れてしまうには都合が良かった。

まあ、今日は学校をサボることになってしまうけど。

それでも、きっとその後はまた、いつも通りへと回帰するのだろう。

もちろん、逃げたい気持ちが無くなったわけではない。

だけど、もう覚悟は決まっている。

さあ、そろそろ家を出ないとお父さんに不審に思われるかもしれない。

そうして私は、いつも通りの時間に制服に身を包んでから家を出た。

昼に待ち合わせをしたのは、理由があった。

朝だと、友達と鉢合わせしてしまう可能性がどうしても高くなってしまうし、夕方すれば学校帰りの寄り道で向かいづらくなってしまうからだ。

板橋公園は常に人気があるとは言えないが、人がまったくいない日もあまりないような、そんな場所だった。

木陰にあるベンチに座り、ぼんやりと公園内を見渡していると、女の子がお父さんらしき男性を引っ張って走り回っているのが見えた。

女の子はとても嬉しそうに笑っているし、男性の方も苦笑いながらも楽しそうなのが伝わってくる。

微笑ましい、という言葉が似合うその光景に、思わず幼い頃の思い出が蘇り、口元がにやけてしまう。

お父さんは基本的には忙しい人だった。

会社が家からそんなに離れてはいないため、朝は少しのんびりだが、残業が多く、休日出勤もよくあった。

だから私は、お父さんが休みの時は思いっきり相手をしてもらった。

今考えると少し酷なことをしていたと思う。

だけど、お父さんはそんな私のわがままを苦笑いしながら聞いてくれていた。

あんな風に公園に連れてきてもらって、遊具の中を引っ張り回したりもしたものだ。

懐かしいな。

そんな風に、思った。

「——お待たせしました。イズミさん」

すぐそばの方から聞こえた声に顔を向けると、私より少しだけ年上に見える女の人が立っていた。

第5話『彼女の出会い・気付かぬ昼』

「……あなたが、メイさん、ですか？」

腰掛けていたベンチから立ち上がり、声をかけてきた女の人に問い掛ける。

イズミが偽名ではないから、というのもちろんあるが、それ以上意外だったからだ。

こんなに若いとは、思わなかった。

確かに、電話の声で若いだろうことには気付いていたが、せいぜいが二十代半ばくらいだと思っていた。

そんな私の気持ちに気付いたのかは分からないけど、彼女は私の質問に頷く。

「そう。私がメイよ。初めまして、イズミさん」

「え？ あ、はい。初めまして、メイさん」

自己紹介されるとは思わなかったため、少し呆気にとられて反応が遅れてしまった。

メイさんは慌てた私の様子を見て、少しだけ笑っていた。

そして、真剣な顔付きに変わって言った。

「さて。それでは、説明しますね。【カーネーション】のことについて。……その前にこんなところで立ち話もなんですし、どこかへ移動しましょうか。その制服も、目立つちゃってますしね」

ふと周りを見渡した彼女は、少し苦笑を浮かべながらそう言った。周りを見渡してみると、少し人気が増えている、私たちに視線を向けていた。

子供連れのお母さん達だろうか。

その時になってようやく、自分が制服のままだったことを思い出していた。

そりゃ、目立つはずだ。

こんな昼間に制服姿の女子高生が公園にいたのだから。

「す、すみません」

「いえ。……そうですね。制服でも、ファミレスとかならそこまでは怪しまれないでしょうし、そこにしましょうか」

「あ、はい。お願いします」

私たちはそう言いながらその場を後にして、近くにあるファミレスを目指した。

第6話『彼女の困惑・お茶目な昼』

ファミレスにつくと、順番待ちも無く、席に案内された。

「それでは、ご注文が決まりましたら、手元にあるボタンでお呼びください」

ウェイトレスさんはそう言い残してから、別の席へと向かって行った。

それをのんびりと見送ってから、向かい側の席に座った彼女は口を開いた。

「とりあえずドリンクバーで良いですか？ 何か食べるなら遠慮無く注文してください」

「……いえ。ドリンクバーだけで大丈夫です」

ちょっと呆気にと取られてしまった。

よく考えてみれば、この状況ってだいぶ不自然じゃないだろうか。

そもそも、彼女は【カーネーション】を売っている『罪人』で、私もそれを買おうとしている『罪人』なのだ。

そんな私たちがこんなところでのんきにお喋りというのは、どう控えめに見てもおかしいと思う。

ふと、彼女が声を殺して笑っているのに気付いた。

「どうかしましたか？」

「……あ、すみません。あまりに不思議そうにしているので、なんだかおかしくて」

どうやら顔に出ていたみたいだ。

恥ずかしい……。

なんだかさつきから度肝を抜かれてばかりだったから油断していたのかもしれない。

「すみません。悪ふざけが過ぎましたね。それでは、そろそろ本題に入りましょうか」

彼女はさっきまでの笑みを消して、真剣な顔で私の方を見つめた。それを見て、私も急いで思考を切り替える。

「……はい。お願いします」

「まず、【カーネーション】について何を――」

「ご注文はお決まりになりましたでしょうか？」

彼女が何かを言いかけたのを、さっきのウェイトレスさんが遮った。

「え、っと、ドリンクバーを二つお願いします」

言葉を遮られて少し止まった後、彼女はそう言って注文を済ませる。

それから、ウェイトレスさんが去って行くのを見送ると、再び私に真剣な顔を向ける。

「【カーネーション】について、あなたはどこまで知っていますか？」

そう、問い掛けた。

第7話『彼女の迷い・戸惑う昼』

私が【カーネーション】という『薬』について知っていることは、そんなには無い。

それを飲めば人の記憶を消すことが出来る、ということくらいだろうか。

そもそも、最初に知った時は半信半疑だったし——まあ、それは今でも変わらないけど、それでもその可能性に縋りたかったという、ただそれだけのことなのだ。

だから、私はこれから自分が飲むだろう『薬』について何も知らないし、本当にそんなことが可能なのかも分からないのだ。

私が思ったままの心境を伝えたと、彼女はゆっくりと口を開いた。「そうね……。その認識は、そんなに間違っではない、です。それに、その不信感も当然と言えるでしょう。ですが、【カーネーション】は、人の記憶を消せるわけじゃないの。ただ、忘れさせることが出来るだけ……」

「……でも、記憶を忘れるのは、消えることと変わらないですよね？」

私の言葉に、彼女は首を横に振った。

「違うわ。忘れるのと消えるのでは、まったく違ってきます。それに、消えた記憶は戻らないけど、忘れた記憶は思い出す可能性があるわ……」

その言葉に、私は固まってしまった。

それはつまり、たとえ忘れることが出来ても、未来永劫忘れ続けることが出来るわけではないということなのだろう。

何かの拍子に——ふとしたきっかけで、思い出してしまうかもしれない、ということ。

「忘れてしまうことが出来ても、それは消してしまうことと同じで

はありません。何かの拍子に思い出すかもしれません。そこは、ご了承くださいかないといけませんから」

彼女はそう言って、私が答えるのを促すように、真剣な瞳で見つめつづけた。

第8話『彼女の決意・覚悟の昼』

「……わかりました」

私はその言葉を紡ぐのに、どれだけの時間が経っていたのかは分からない。

それだけの時間、悩んでしまっていた。

正直、怖かった。

忘れていたはずの過去を、唐突に思い出すことが。

だけど、一時的にでも忘れることが出来れば。

そう思ったのだ。

「分かりました。それでは、契約は成立ということですのでよろしいですね？ さて、それでは詳しく説明していきますね」

彼女はそう言って、持っていたバッグからファイルを取り出し、その中にファイリングされていた紙の中から一枚を抜き取った。

「これが料金表となっていますのでご確認ください。料金は【カーネーション】の質と量——つまり、忘れない記憶の過去と期間で分かれています。また、現段階では一週間単位でしか操作できませんが、そこは理解をしてくださいますようお願いします」

彼女の見せてくれた紙は、上と下で分かれていた。

上の方には縦と横の照らし合わせによる簡単な表が書かれていて、下の方にその料金が記されていた。

私の場合だと、二週間前のことを忘れたいから、二週間前の一週間の記憶の分、ということ……『B・1』かな？

「また、過去の例から言わせてもらいますが、忘れたと思ったのが一ヶ月前だった場合、その一ヶ月の記憶をまるまる忘れた方が良みたいですね。確かに値段は上がりますが、悩んだりして思い出していた場合ですと、それがきつかけとなって思い出すという例がいくつかありましたので。どうするかはあなたの判断に任せますが」

彼女はそう言って立ち上がると、私に飲みたい物を聞いてからドリンクバーの方に取りに行ってしまった。

忘れたい記憶のある部分だけを忘れる『B・1』は8000円、その時からの記憶をまるまる忘れることが出来る『B・2』は12000円となっていた。

確かに少しだけ迷うような金額差だった。

だけど、思い出す確率が少しでもさがるなら、4000円はしかたないのかもしれない。

そう、思った。

第9話『彼女の本気・警告の昼』

「はい、どうぞ」

彼女は両手に持っていたコップの片方を私の前に置いてから自分の分もテーブルに置くと、そこでようやく席に座る。

「あ、ありがとうございます。それと、あの。【カーネーション】なんですけど、この『B・2』を欲しいな、と思ひまして……」

私は表を指差しながら示して見せる。

すると彼女は、真剣な目で私のことを見つめてきた。

そして、そのままの状態で口を開いた。

「12000円ですが、本当に良いんですか？」

確かに、家が金持ちとかそういうわけでもない、ただの女子高生である私からすれば、この金額は痛い。

それでも、それを代償にあの日のことを忘れられるのだ。

そのための12000円なら、むしろ安いものだ、と、そんな風に思えた。

そもそも、普通の『薬』なら、こんな安くはないだろう。

病院から出る薬だって結構な値段するのだから。

「——はい。お願いします」

私の言葉に一つ頷くと、彼女の顔が少しだけ和らいだ。

そんな気がした。

「分かりました。それでは、私のとこの『花屋さん』へご案内します。——いえ、その前に何かお腹に入れたい方がいいですね」

そう言うと、私の方にメニューを差し出す。

私としては早く忘れたいんだけど……。

そんな考えが顔に出ていたのか、彼女がそのままの表情で——今は目は笑っていないかったが、口を開いた。

「焦る気持ちになるのも仕方ないですけど、ほとんどの『薬』は空

腹時に飲むのは好ましくありませんからね。用法と用量をきちんと守らなくては、うまく効いてくれないどころか、大切なものも一緒に無くなってしまいますよ?」

それは、脅し——いや、警告だった。

少なくとも、今の時点で彼女に逆らうのは自殺行為だと言うことなのだろう。

肉体的な話ではなく、精神的な意味で。

【カーネーション】が本物であるなら、記憶喪失という名の精神の殺人を、彼女は容易に行えるのだから。

「……わかりました。何か食べてからでお願いします」

「察してくださいまして、ありがとうございます。話が早くて助かります」

彼女はそう言って、無邪気そうに笑った。

第10話『彼女の確信・思考の昼』

「それでは、そろそろ行きましょうか」

ご飯を食べて少しの間休むと、彼女はそう言って立ち上がった。私もそれに続くように立ち上がる。

お会計を呼び、伝票を見ようとすると、彼女はそれを取り上げるように私の手から抜いて口を開いた。

「ここは私のおごりです」

有無を言わせないような笑顔を向けると、さっさと会計を済ませて外へと向かう。

私も急いで後を追いながら、気になっていたことを聞いてみることにした。

「……どうしてあなたのような人が、こんなことをやっているんですか？」

こんなこと、というのはもちろん、【カーネーション】のことだ。麻薬に分類されるだろう薬を売るのは、間違いなく犯罪だし、そもそも薬の類を販売する時って国の許可が必要だったんじゃないか？ たっけ？

資格だっけ？

まあ、とにかく、法律違反なのは確かだ。

それを私とそんなに歳の変わらない……なにより、細かな気遣いまで出来る人が、どうして警察に捕まる危険を犯してまでこんなことをしているのか、気になった。

彼女は少し視線をさ迷わせた後、ごまかすように苦笑にも見える微笑みを浮かべた。

「……誰にだって、事情というものがあります。今までの人もそうでしたが、あなたも忘れてしまいたい記憶の内容を私に話すことは躊躇うでしょう？　そういうものですよ」

その言葉に、体が反応したのが、自分でも分かった。

確かに、私もあの日のことを聞かれても話すのは躊躇う——いや、はつきり言ってしまうえば、断るだろう。

つまりはそういうことなのだと、彼女は言っているのだ。

それでも、一つ確信を持てたことがある。

彼女にも、この【カーネーション】を売ることでは何かを得ようとしているということ。

それはもちろん、金銭的な話ではない、もっと別のものなのだろう。

そう考えてようやく、自分の中に生まれていたもやもやの正体が分かった。

彼女からは、お金に対しての執着心が感じられなかったのだ。

そうであるにも関わらず、警察に捕まる危険のあることを続けている理由が分からず、それがもやもやとして心に残っていたらしい。

「……ここです」

彼女のその声に、ハッとして顔をあげる。

考え事をしていて気付かなかったが、いつの間にか目的地に到着したらしい。

そして、目の前に広がっている光景に少し呆然としてしまった。

「ここって……板橋公園？」

ゴール地点であるはずの『花屋さん』は、スタート地点であるはずの公園だった。

第11話 『彼女の真実・種明かしの昼』

「はい。今日の待ち合わせ場所、スタート地点のここが、今回の『花屋さん』です」

彼女はあっさりと言うと、そのまま中に入って行く。

「そろそろ少しだけ種明かしでもしましょうか」

「種明かし……？」

「そうです。まず、あなたは疑問に思うべきでした。私があなたを『イズミさん』と断定したことを」

何を言っているのか分からない。

そんな私を無視するように、彼女は歩を進めながら言葉を続ける。
「でも、それ自体は不思議でもなんでもないんじゃないじゃ……」

「待ち合わせ場所、ですよ」

待ち合わせ場所って、板橋公園のことだよね？

何が――。

いや、違う。

待ち合わせ場所はもっと細かく指定していた。

板橋公園の入口だと。

いや、待って。彼女が私を見つけたのは……声をかけたのは……。公園の中にある、ベンチだったはずだ。

待ち合わせ場所でもない、そんなところにいた人に、気軽に声をかけたりするだろうか。

当たり前のように名前を呼んだり――。

「私はね、知りたいんだよ。忘れてしまった記憶の、取り戻し方を。その方法を。だからね――」

そこで彼女はくると振り返ると、初めて見せる残酷な笑顔を浮かべて、笑っていた。

「勝手に試作品の実験体になってもらっているあなたには悪いとは

思っても、止まるわけには行かないんですよ。たとえ誰を犠牲に
てしまったとしても。そう思わないですか？ 『常連の』イズミさ
ん？」

その時に私を襲ったその感覚の例え方を、私は知らない。

無理矢理に例えるなら、きつと忘れていた夢を思い出す感覚に近
いモノ、だろうか。

グラグラする視界に堪えられなくなって地面に座り込んでしまう。
思考がどこかに吹っ飛んだような、気がする。

彼女は私を『常連』だと言った。

その意味を、私は――。

「ああ、やっと効いてきたみたいね。さあ、思い出して。あなたの
過去を。忘れてしまった、その記憶を」

第12話『彼女の現実・様子見の昼』

彼女のことを知った時から、そんな不安があったのは確かだ。

もしかしたら、という可能性が怖くて、考えることを避けて続けた。

そう。前にも何度かあったのだ。

数週間分の記憶を忘れていることが……。

学校の友達にその忘れているときのことを尋ねても、その記憶のない時間も、私は何事もなかったように毎日を過ごしていた、という答えしか返っては来なかった。

だから、彼女のことを知ったときに、考えてしまった。

もしかして、と。

だけど、それは同時に、あの日が初めてではなかったのだと、そういうことにもなり得てしまう。

だから、その可能性について考えることを拒絶した。

これがきつと、思い出すということなんだと思う。

忘れていたはずの日々の記憶が、早回しで再生されるような感じだ。

そしてそれは、最後は決まって彼女から買い取った『薬』――【カーネーション】を飲んだ後に、眠りという闇に落ちていく意識とともに消えていってしまう。

そうして、繰り返される。

こうして、繰り返してきたのだ。

それが、現実、なんだ。

「――思い出した、みたいですね」

「――はい。色々なことを、思い出すことが出来ました。ずっと、

助けてもらっていたんですね、私……」

「それでは、思い出しましたか？ 私の言った言葉を。今なら、分かりますか？ その言葉の意味が……」

その言葉に、忘れていた記憶の終わるとき、最後の記憶が途切れる直前に、毎回、彼女が口に使っていた言葉を思い出す。

『すべての過去を受け入れるために——それくらい強くなるために必要な時間を、期限つきではありませんが、その時間をあなたにあげます。けれど、その時にそれを受け止められるのか、それで幸福になれるのかは、その時のあなた次第です』

確かに、今なら分かる気がする。

前のときよりも、衝撃が無いのが分かるから。

それは、私の心が成長して強くなった、ということなのだろうか。それでも。

「……今日がもう、その期限の日、なんですか？」

「いえ。まだ先の話ですよ。今日はまあ、実験を兼ねた様子見です。もちろん、大丈夫ならそれも構いませんが……」

今はまだ、過去は過去、だなんて、そんな簡単に割り切ることが出来ない。

今はまだ、受け入れることが出来ない。

だから——。

「すみません。今の私にはこの記憶を受け止めることが出来そうにありません。……なので、【カーネーション】をください」

私がそう言うと、彼女は一度頷いてから、【カーネーション】の置いてある場所へと足を進めた。

私も彼女を追いかけるように歩きながら、少しだけ考えてみた。確かに今はまだ、受け止めることが出来ない。

だけでもしかすると、この記憶ともちゃんと向き合えるときが来るのかもしれない。

そう思えた。

第13話『彼女の忘却・入院の昼』

目を開けて広がった景色は、見覚えの無い、少し汚れた白い天井だった。

「――あれ？」

どこだろう、ここ。

昨日、友達の家とかに泊めてもらったっけ？

確認するために体を起こそうとすると、ずきん、と頭に痛みが走った。

何が起こったのか、分からない。

だけどこれ以上の痛みを感じないように、そのまま体を後ろに倒した。

そんなことをしていると、引き戸の開く、ガラガラという独特な音が響いた。

私は頭の痛みを無視するように、その音が鳴った場所へ顔を向ける。

そうすることでようやく、ここがどこなのかを理解した。

いや、正確に言うとう、彼女の持つ花を見て、どういふところなのか、予想がついた。

ああ、病室か、と。

半ば納得するような奇妙な感覚を覚える。

「……ああ、起きたんですね。良かった……」

そう言いながら、安心したように顔を綻ばせる。

少し年上くらいだろうか。

少なくとも、私にとっては見覚えのない女の人だった。

誰だろう、この人？ どこかで会ったかな？

そう思いながらも、その柔らかな空気に私も思わず顔を崩してしまふ。

その人は慣れたように私のベッドの隣に持ってきた花を飾ると、パイプ椅子を持ってきてベッドの横に広げた。

そこに腰掛けようとして、ふと顔をあげる。

「ああ、すみません。紹介が遅れました。初めまして。メイといいます」

そのあと、お父さんが病室に駆け込んできて、何があったのかを説明してもらった。

話によると、私は学校に行く途中の公園――板橋公園で倒れていたところを、このメイさんが発見し、救急車を呼んでくれたらしい。それから、お父さんのところにその連絡が来て、今に至る、というわけである。

ちなみに、検査したけど特に異常は見つからず、体の中も外も健康体そのものらしい。

意識が無い状態だったことから、念のための様子見、ということ、一日入院させるように言い渡された、ということだった。

そんな事情を話し終わると、帰る前に少しだけ二人で話したいと言ったメイさんに、お父さんは快く席を外してくれた。

私もちゃんとお礼を言いたかったからちようど良かった。

「メイさん。あの、今日はありがとうございました」

「お礼を言われることじゃないわ。それに、そんなことを言われると、私はあなたに謝らないといけないんだし」

「……謝る？　なんで？」

彼女の言葉の意味が分からず首を傾げている私を無視するように、彼女は真剣な顔になると私を見つめた。

「……それより、あなたに言っておきたいことがあるの」

「言っておきたいこと？」

「……今のあなたにとっては、確かに重いものかもしれませんが。逃げるのも仕方ないのかもしれませんが。けれど――それでも、向き合

わないといけない時が必ず来るでしょう。そして、もしその時に、すべてを受け止められるくらいに成長していれば、それはきつと逃げじゃないのだと、私は思います」

何を言っているのか分からない。

だけど、何かが引つ掛かるような、そんな気がした。

彼女はそれだけ言うと、病室を出て行ってしまふ。

それからはお父さんがやたらと心配していたこと以外は特に何事も無く、一日の入院を終えて、無事に退院した。

そして私は、またいつも通りの一日を過ごす。

ただ、心配をかけそうだったから誰にも言わなかったけど、不思議なことが二つあった。

一つは、昨日――病院で目を覚ました日が、私の覚えている最後の日から数えて、ちょうど二週間が経ってしまったということ。みんなの話から推測すると、その間のことに關しても、私は特に変わり無く過ごしていたらしい。

まあ、そもそも記憶が無い時間なんて結構あるものだ。

きつと、いつも通り過ぎてどうでもよかったのだろうと、そう思うことにした。

もう一つは、財布の中から20000円という大金と、5000円分の見慣れない領収書が出てきたということ。

普段はなるべく持ち歩かない様にしているから、使う予定があったのかもしれない。

それにこの領収書――『【カーネーション】の代金』って……。それに、5000円って……。

日付を見ると昨日の日付が入っていた。

でも、手元にはそういったものはないし、そんなモノが落ちていたとか、そういう話も聞いてない。

まあ、記憶が無いとはいえ、私のことだ。

たぶん、衝動買いか何かをしたんだろう。

それで解決したことにしておこう。

なんだか、そう遠くない未来に思い出すような気もするし……。

第一部・後書き

こんにちは。神崎慧こうざき・けいです。

【カーネーション】をここまで読んでいただき、ありがとうございます。

本編はまだ続きますが、イズミさんの話も無事に終わったので、この辺りで一度区切りを付けるために、第一部の後書きという形で書かせてもらうことにしました。

そんなわけで、第一部、いかがでしたでしょうか。
少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

第一部では、お客様であるイズミさんに主な語り部として頑張ってもらいました。

というか、そうしないと彼女が忘れない過去がどういうモノかが語られることはなかったでしょうからね。

そう考えると、これから先もお客様に語り部を頼むことになるのか？

彼女の過去もちゃんとした描写はしていませんが、そこはまあ、なんとなくでも分かってくれると嬉しいですよ。

それにしても、本作の主人公であるはずのメイは、第一話以降はあくまでも相手として向かい合っているだけで、内面としては何も語ってはいくれませんでしたね。

そんなのでこれから先もやっていけるのでしょうか。

そもそも、彼女——メイは、主人公として認められているんですかね？

ちなみに、イズミさんはこれから先に出番があるのか未定です。
まあ、案外ひょっこりとでてくるかもしれません。

そんなわけで、次からは第二部に入って……いくのかな？

もしかしたら番外編みたいな位置付けの話を挿入したりするかもしれないませんが、また読んでもらえると嬉しいです。

それでは、なんだか長くなってしまいましたが、こんなところまで読んでくれてありがとうございます。

誤字や脱字を見つけたという方は教えてくださいと有り難いです。
また、感想や評価、メッセージなども募集していますので、何か書いてくださると嬉しいです。

続きも頑張っていきますので、よろしく願います。

第二部プロローグ

光。

雨が降っていて薄暗い中、ただそれだけが印象的だった。

迫ってくる車のヘッドライトが、眩しくて、思わず目を閉じていた。

耳に響くのは、クラクションと、ブレーキの音。

そして、誰のモノかも分からない、悲鳴。

場違いにも、うるさいと感じてしまった。

それから、すぐに衝撃を感じた。

だけどそれは、思っていた方向とは違っていて。

思っていたよりも、ずっと軽いものだった。

ほとんど痛みを感じない体を不思議に思いながら目を開けると、道路の脇の方において、中心の方に人が倒れていた。

そのすぐ傍には、さっきまで私に迫っていたはずの車があり、そのライトの照らす先にある水溜まりが、赤く染まっていた。

たくさんのクラクションが鳴り響く中、呆然と、ほとんど無意識に体を起こしている自分に気がついた。

擦り傷でも負ったのか、痛みを感じながら、それでもその倒れている人に近づく。

なんだか、見覚えがある気がして。

どうしてか、知っている人だと、思ったから。

そんなわけ、ないのに。

あるはずが、ないのに。

それなのに、何故か、そう感じてしまったから。

近づくにつれて、影になっていて見えなかった顔が、見えていくのがなんだか印象的だった。

少し、茶色く見えるその髪の色は、私の知っている彼に似ていた。

その服も、なんだか見覚えがある気がする。

いつか彼が同じ服装でいたように記憶している。

その顔も、双子なんじゃないかと、そう思うほどにそっくりだった。

そう。

それはあまりにも彼に――最近付き合いはじめた彼に、とてもよく、似ていた。

「――いやだ……いやだああああああっ」

私の口が、叫びをあげた。

認めたくない頭が、現実を否定するように動いていたにも関わらず。

それでも、体は正直に、現実を見つめているように。

心が拒んでいたにも関わらず、この人が、彼本人だということを、理解していた。

第二部1話『彼の事故・振り返る事実』

あの交通事故から二ヶ月がたった。

あのあと、救急車で病院に運び込まれた俺は、なんとか一命を取り留めた。

しかし、トラックに轢かれて五体満足、という都合の良い結果にはならなかった。

別に、四肢のどれかがちぎれたとかそういうことなく、医者から告げられたのは、下半身の麻痺——それはつまり、一生の車椅子生活の宣告だ。

リハビリをしても治る見込みは無いということだった。

もちろん、それに対して絶望しないほど楽観的でもポジティブでもない。

それでも実際のところ、トラックに轢かれて生きているというだけでも奇跡と言えるのは分かるつもりだし、彼女に俺の死というモノを背負わせなかったことに、安堵があったのも確かだった。

しかし、彼女はそうは思わなかったらしい。

自分が悪いんだ、自分が俺をこんな風にした、と自分を責めた——らしい。

最初の頃は、俺の前では気丈に笑って見せていたから——あまりにも当然のように、養ってあげる、なんてことを冗談混じりに言っていて笑い、今までと変わらないように接していたから、俺はその彼女の異変に気付くのが、遅れてしまった。

もちろんそれは、彼女の異変に気づけなかった自分に対する言い訳ではあるが。

いや、言い訳でしかないんだけど。

だけど、俺が気づいたのは、その笑顔も少しずつ無くなっていった頃だった。

この思いに気づいたのは——いや、気付かされたのは、そんなに前のことではない。

だけどそれは、ただ気付いていなかっただけで、大分前から抱いていたらしい。

もちろん、ずっと大切な人だとは思っていたけど、それもただ友達——親友のそれだと、そう思っていた。

ただ、それだけのこと。

幸せそうに笑う、彼女の笑顔が好きだった。

拗ねたようにいじける彼女を、かわいいと思った。

悲しそうに歪む泣き顔は、見たくないと思った。

ころころと変わる表情は、見ているだけで楽しかった。

率直でも気遣いを忘れない彼女に憧れた。

人懐っこい性格に——そうしてほとんどの人に好かれる彼女に、少しだけ、嫉妬した。

そうしている内に、惹かれていたのだと、そう思う。

色々あったけど、それに気づいて、後押しされて——想いを、伝えた。

断られると思ったそれは、だけど受け入れられて。

そうして今の関係に——恋人という関係に、落ち着いた。

あの日、寝坊してしまった俺は、目覚まし時計を見て、頭が真っ白になった。

待ち合わせ時間をとくに過ぎた時刻を指すそれを眺め、信じたくない気持ちに後押しされ、携帯電話を開いて——呆然としてしまった。

そこに表示されていたのは、すごい数の着信履歴とメールの受信履歴。

そのすべてが待ち合わせ相手である彼女からだった。

急いで電話を掛けて謝り倒しながら準備をしていた俺は、ちょっとした罰を宣言されたあと、天気も悪いから、今日は出かけるの止めよう、と言われて初めてその天気——結構すごい雨が降っていることに、気づいた。

そうして電話を切られて——だけど俺は家を飛び出すように出て、待ち合わせ場所に急いだ。

嫌な予感がした、なんて訳ではない。

ただ、彼女に直接会って謝りたかった。

そうじゃないと、自分が納得できなかった。

走って向かっている途中で見つけた彼女の姿に——近づいて、声をかけようとして——ようやく、気付いた。

薄暗い中を、光が——彼女を照らし出していることを。

俯いていた彼女が、ようやく状況を知ったらしいことを。

頭が理解するよりも早く、体が動いてくれたらしい。

そのまま速度を上げ、彼女を道路の隅へと、突き飛ばしていた。

そうして、気が付けば病院のベッドの上だった。

ただ、それだけのこと。

聞かされた話でしか分からないけど、どうやら一命を取り留めたことと、彼女も無傷とは言えないものの、軽い擦り傷や打撲、捻挫といった怪我ですんだということ、そして——俺はこの先、走ることはおろか、歩くことも出来ないだろう、ということだった。

今にして思えば、あの時から彼女の心は少しずつ壊れ始めていたのかもしれない、そう思う。

あの時は気づけなかったけれど、結果が出た今は想像することが出来る。

そして、結果が出た今になってようやく——思い知った。

俺は彼女を助けることが出来ていなかったことを。

体は守れても、心を護れていなかったことを。

目の前に――ずっと傍にいながら、こうなる前に気付くこともなく、だからこそ救うことも出来なかったことを。

そして、後悔しながら――思い出した。

前に聞いた――噂話を。

人の記憶を消すことが出来るという薬――【カーネーション】の存在を。

そしてそのときに知ることの出来た、唯一の売人の電話番号を、自分の携帯電話に登録していたことを……。

第二部2話『彼の想い・振り切る事実』

アドレス帳を開くと、登録したデータのまま、それは残っていた。それを見つめながら考えるのは、心を護れなかった彼女のこと。

もし、この事故を忘れさせることが出来れば、彼女はあの頃に帰れるかもしれない。

あれから見れていなかった――心の底から笑った――本当の笑顔を、取り戻せるかもしれない。

だけど――俺の身体は、元通りとは、言えない。

あの頃と同じではないこの身体から――好奇心旺盛な彼女は――たぶん、事実にとどり着いてしまう。

そのとき、彼女は忘れていた自分を――許すことが、出来るだろうか。

答えは、否――だろう。

それなら――。

そこまで考えて、怖くなった。

その考えは、たぶん、自分の否定だ。

いつの間にか、彼女といることが当たり前に感じるまでになっていることに、少しだけ苦笑してしまう。

それでも。

もし、彼女が俺のことを忘れれば――付き合っていたという事実だけではなく、最初から――出会ったあの頃からのことをすべて忘れてしまえば。

彼女の中から、俺という存在を消して――いや、最初から無かったことにしてしまえば。

そうすれば、あの頃との共通点を見つけることは、出来なくなる。そうすれば、あの頃と変わりのない彼女に戻ってくれるかもしれない。

もしかしたら、俺と付き合い合っていたという事実を忘れてしまえば、他の誰かと付き合いはじめられるかもしれない。

それは、嫌だった。

想像するだけで身体が――心が震える。

彼女を失いたくないという、恐怖と、そのときに感じるだろう、喪失感。

彼女を誰にも渡したくないという、独占欲。

彼女と付き合う相手に向けられる、嫉妬。

その相手に嬉しそうに笑いかける彼女に対する、怒り。

様々な感情――激情とも言えるそれが、心を埋め尽くす。だけど。

そんなどろどろとした感情が、ふと勢いをなくした。

幸せになってほしい。

そう思った途端に。

確かに、ずっと傍にいてほしい。

離れてほしくない。

――それでも。

もし、そうすることで彼女が幸せになれるというのなら。

それで彼女が、笑顔を取り戻すなら。

俺は――。

俺は、その番号を表示させると通話ボタンに指を掛け――そのまま、押した。

第二部3話 『始まりの着信・勇気の源泉』

お風呂から上がり、そのままベッドに倒れ込む。

髪がちゃんと乾いていないからシーツが濡れるが、そんなに気になるほどじゃない。

俯せに寝転んだままぼんやりしていると、すぐそばに置いていた携帯電話が鳴り出した。

表示は『非通知』。

まあ、よくあることだ。

「……はい。もしもし?」

[illegible]

「——はいはい。お疲れ様」

呪詛を唱えるように続くそれに、私はそれだけ言つて電話を切つた。

最近、この手のいたずら電話が増えてきた気がする。

まあ、仕方ないといえば仕方ないのだけど。

私がメイとして活動を始めてから二年。

記憶を忘れさせる、なんていう触れ込みのせいかは知らないけど、
 こういう電話が増えたのは確かだった。

それでも非通知を拒否しないのは、客のほとんども非通知で掛けてくるからだ。

麻薬と思われる薬に手を出すのだから、最低限の警戒とも言える。
ため息を吐いて携帯を元の位置に戻す。

とほぼ同時に、再び着信が鳴り響いた。表示されているのは知らない番号。

この携帯電話は、今まで通知して掛かってきた番号はすべてアド

レスに登録してある。

つまり、今まで通知して掛けてきたことはない、ということになる。

そういえば、最近是非通知か常連ばかりだったな、と思いながら電話に出る。

「……はい、もしもし？」

『——メイさんの携帯電話で宜しいですか？』

「ええ」

『【カーネーション】を発注したいのですが、こちらで間違いなかったでしょうか？』

「——はい。伺います」

最初に感じたのは、若く柔らかい声に似合わない硬い口調の違和感だった。

営業を仕事にしている人がするような、マニュアルでもあるかのような、そんな口調。

だけどそれは、慣れていない人が口にすれば、たやすく見破ることが出来る。

彼は、慣れていない側の人間だった。

お客様の立場なのだから、別にそこまで頑張らなくても良いと思うけど……。

とりあえず、様子見かな。

『……それであの、どこに行けば良いですか？』

「お客様が指定する場所で構いません。——と、すみません。その前に、お名前をお聞きしても宜しいですか？ もちろん、統一していただければ偽名でも構いませんので……」

『ああ、すみません。そうですね……。それでは、マサキでお願いします』

「マサキ様ですね。分かりました。それでは、日時と場所の指定を

「お願いします」

第二部4話『始まりの記憶・自信の源泉』

時間と場所を聞いた私は、そのまま別れを告げて電話を切った。すぐに登録してから電話を閉じる。

携帯電話のアドレス帳はメモと一緒に残すことが出来るから便利だと思う。

いつの客か、どんな人かを残しておけるから、すぐに思い出すことが出来るのだ。

それにしても、だ。

なにか、いつもとは違う気がしたのは何なんだろう。

焦るのは今までの人と変わらないし、口調が丁寧な人も何人かいた。

だけど、なぜだかは分からないけど、いつもとは何かズレてるような。

なんか、そんな気がした。

最初の頃は無差別に近い勧誘方法で麻薬の常習犯を捜し、実験台として使っていた。

ただ、この商売は裏の世界のテリトリー。

縄張りが荒らされれば攻撃して来るのは人間も動物と変わらない。しかも、私が売るのは大麻や覚醒剤といった有名なモノじゃない。つたのも、原因の一つかもしれない。

何度喧嘩を吹っ掛けられ、拉致され、犯されかけたか分からないくらいだ。

まあ、それくらいはあるだろうなと予想していたし、対策だっただけ。していたからそれほど問題はなかったけど。

要は、手が結ばれていようがなんだろうが、『そういったことを、相手にさせなければ良いだけの話。』

それは、相手の記憶を忘れさせることが出来る私にとっては、それほど難しいことではなかった。

記憶を忘れれば、人は自分のことを知らないことになるし、何をやっていたか、何をすれば良いのかを見失う。

それはヤクザでも警察でも、社会人でも学生でも変わらない。

なにせ、それまでのことを――自分が何をしようとしていたのかも、すべて忘れてしまうのだから。

鳥が最初に見たモノを親だと思うのとそれは、何が変わるというのだろうか。

そうなってしまえば、嘘も本当も言われてしまえば鵜呑みにしてしまう。

どんなに疑いたくても、覚えていないモノは肯定も否定も出来ないから、そうすることしか出来なくなる。

そうでなければ、自分のことが希薄になるから。

それを『怖い』と思ってしまうから。

そして、一度植え付けてしまえば育つことしか出来ないし、記憶が戻っても――そうなった時に、たとえその時のことを覚えていなくても、身体が言うことをきかなくなる。

私に危害を加えたり出来なくなる。

そして、『思わず』私の言葉に従うようになってしまう。

洗脳という言葉があるけど、あれは『脳を洗う』と書くものだし、有名な洗脳方法で寝ている時に言葉をかけ続ける、というのもある。催眠術を掛けるときに眠った状態にして頭を真っ白にさせるのもそれを使ったモノだと、勝手に納得している。

それなら記憶喪失という状態は、その状況と比べてどんな違いがあるというのだろうか。

つまり、そういうこと。

そうして色々なところで繰り返すうちに、私に手を出す人はいな

くなつた……。

「ふああ。ねむ……」

考えてみれば寝る準備が出来たところでの電話だったし、そんなものも仕方ない。

次の仕事は金曜——明後日の昼前だけど、明日は普通に学校に行かなきゃいけないし、放課後は約束がある。

そろそろ寝なきゃ……。

【カーネーション】第二部5話『始まりの仕事・商売の源泉』

木曜日、放課後。

今日も特に何事も無く授業が終わり、待ち合わせ時間まで少しあったのもあって、一度家に帰って軽くシャワーを浴びてから待ち合わせ場所に向かう。

少し遅くなりそうだからさすがに制服のままだとあれだし、今日は体育があったから汗も流したかったというのもある。

「……おまたせ」

私の声に振り向く待ち合わせ相手。

まだ約束の10分前だというのに、当たり前の顔して待ってる彼女は、一体どれくらい前に来てたんだろう……。

「……遅かったね」

「まだ時間前でしょ？　むしろ、あんたが早過ぎ」

「そう？　普通だよ」

あんたが普通を語るな。

ほぼ確実に『騙る』になるから。

というか、なんでコイツは制服なんだ。

「……まあ、言いたいことは分かるけど、事情ってモノがあったんだよ」

「はいはい。じゃ、とりあえずあんたの家にいこっか。着替えなきゃ、でしょ？」

「ん」

私が歩き出したのに従うようにしてついてくる。

……どこのひよこだ。

気安い友達、なんて言い方は何か間違ってるような気もするけど、彼女を指す言葉としてはそれが適当かもしれない。

親友、と言えるほどに仲が良いという訳ではないけど、私の仕事――【カーネーション】の売人であることを知っているうちの一人。みんなが恐れて近づかない中で、なにも気にせずに近付いてきて話が出来理由は、たぶん彼女自身が元々はお客様だったからだと思う。

最初の頃――忘れる記憶を少しずつ調整できるようになってきた頃に、私から【カーネーション】を買っていった、『最初のお客様』。

『実験』として繰り返していた私に、『商売』としてやっていくという入れ知恵を与えたのが、彼女だった。

もちろん、【カーネーション】を使う直前に話したようなそんなことは、次に会った時にはすっかり忘れちゃっていたけどね。

でも、同じ学校に通っている彼女を無視することも、あの頃の私には出来なかった。

まあ、観察対象でしかなかったのかもしれないけど。

そうして外では『実験』を繰り返しながらも、学校にいる間は彼女のことを気にするようにして過ごしていた。

そうしている内に、気がつけば彼女の記憶は戻っていた。

いつ、どんなときに思い出したのかは教えてもらえなかったけど、急に私のところに来たかと思えば、思いっきり頭を下げて感謝された。

ありがとう、と。

おかげで心に整理をつけることができるようになった、と……。それが、始まり。

私が今の仕事をするようになった、きっかけだった。

「――どうしたの、ぼーっとして？」

その声に気付くと、私の顔を下から覗き込むようにして首を傾げる彼女が見えた。

「……ああ、うん。ごめん。なんでもない」

「そう？　ならいいけど」

それだけ言うと、彼女は何事もなかったような顔をして、いつの間にか止まっていた私の先を歩き出した。

先輩のことだけで頭がいっぱいで、周りに目を向けられなかったあの頃、彼女と出会わなければすぐに警察に捕まって、それで終わっていたと思う。

もう少しで、あの時から続いてた全部が終わる。

忘れていたモノを思い出させることが出来るようになる。

だから待っててね、先輩。

あと少しだけだから……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5258h/>

【カーネーション】

2010年10月9日16時01分発行